

槐

かい

岡井省二創刊

令和2年5月号

令和二年五月十八日発行 第三十巻第五号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

通巻第三四七号 毎月一回 一頁発行



うららかや

高橋将夫

雪解けの水おのづから水の道
見つめ合ふ一瞬があり春の雷
うららかや途中で止まる数へ歌
うららかや同じ話の繰り返し

この人にこのスキャンダル春の雪
蛇穴を出づるや地球温暖化

胎盤の中で見た夢春の夢
角砂糖溶けて霞となりにけり
レーダーをかい潜りたるつばくらめ
完璧に発生したる雪崩かな
故郷は宇宙にありて龍天に

槐安集

加藤みき

末黒野や力をためてをりにける
初蝶やひらひらひらり天空へ
牡丹の芽待つてゐたよと風立ちぬ
くつさめやそないぴりぴりしなさんな
どなたくの申し子のやう朗らなり

中島陽華

年男桐の柾目の下駄履いて
食積の集めてゐたる眼かな
子が笑ふやうに笑うて老いの春
旅立はバナナとチーズ日脚伸ぶ
オリオンや恋知りそめし指のさき

近藤喜子

初音いま天の封印解きにけり
ユーモアの中の真実あたたかし
あの蜷のやうに道中たのしまん
予報士の指の引き寄す春一番
何とかなると神名備に残る鴨

瀬川公馨

声帯の潰れし男寒念佛
政客か論客かはて春の虹
春霞の鯨ベークン擬かな
獅子袖に千条の皺隠れたる
春どなり死角に立ちし男かな

竹内悦子

鬼は外虎猫前を横切りぬ
天井に縞馬の光^ケ春の昼
大腸にポリロープ一つ春の夜
関西医大緊急病棟猫の恋
令和二年二月二十日米寿とや

雨村敏子

^{祝「喜悅」}
立春や喜悅の波動給はりぬ
墨を磨る音春の夜の熨斗袋
亀鳴くや天上のこゑ耳奥に
見なれたる一木の影二月かな
神のゐて親方のゐて春普請

柳川晋

青空に穴空いてをりふぐり草
ランボーの商ひの春ソドムにて
げんげんを撒く人もまた花神にて
しやぼん玉バブルを知らぬ親御たち
如月の空はらわたを見せてをり

熊川暁子

^{もの}の^べ
物部氏の栄枯を見たる日負ひ鶴
凍蝶のあたたためてゐるマリア像
アナログの人間で良し青き踏む
控へ目といふ侘助の効かす紅
寒晴れは浮き立つものを引き寄する



江島照美

鷹鳩と化して女時は男時へと
火種なき褻の日に落つる春の雷
粧うて本音隠せず山笑ふ
寒明けの大往生の知らせかな
春の雪少女寡黙になりにつけり

岩下芳子

山いくつ潜り潜りて春の川
川底に地図展げたる蜷の国
遠くまで何の種蒔く男かな
日当りて春耕の土目覚めたる
ゆつたりと葉を重ねつつ春キャベツ

寺田すず江

李里子とん逝く
早春の雲追ひかけて逝きにけり
高らかに雉子きぎす鳴きたり禁獵地
今といふ刻の重さよ亀鳴けり
くさぐさの鼓動たしかや日脚伸ぶ
記憶なぞ当てにはならぬ春氷

有松洋子

肩凝つてゐる人ばかり雪曇
立春や神が門はづす音
どこにでも行けるを知りぬ蟻出でて
花ミモザ登校のこゑきらきらと
げんげ野や遠くに亡友ともの座りゐる

岩月優美子

なるやうになる豪快に山笑ふ
啓蟄や自由なる身を謳歌して
老いは早し心にいつも野のすみれ
リ（梅）ラ犬塚李里子さん咲くや神に召されし日の早き
こだはりを捨て遥か見る春の海

竹中一花

水仙の道に墓ある嬉しさよ
権兵さんの種を蒔きをりしゆらしゆしゆ
臍に四温の風や窓を拭く
二ヶ月の十二神将風に立つ
白梅や貨車動き出す夜の駅

近藤紀子

春立つ日句集喜悦の薫りかな
冬雲の肩にずしりと乗つかりて
橋おぼる渡れば何かありさうで
鳥来てはついでばむ豊饒實南天
風花の向かうは新しき季節

前田美恵子

ハイヒールの音の乱れや春一番
若菜摘幽かに聞こゆ鬨の声
亀鳴くや決意崩れてしまひける
水面の膨らんでをり柳絮とぶ
初花や形見分けなる花器三つ

中田禎子

心根はいつも二月の八甲田山
駅員の指呼南への春の旅
伊予柑や城と仏を巡りける
留守の家の闇に動きや梅香る
寒木瓜やコミック本を積み上げて

吉田順子

初蝶の生れたる草の揺らぎかな
蒼天を引き寄せ梅の純白に
春水のかがやき走る瀬音かな
まんさくの花ちりちりと日暮れけり
心地よきひとりの座あり春燈火

槐市集

阿部さちよ

時氷亡母を偲びて・三十三回忌るなきがらの唯合掌す
渾身「二世風如夢」を拝観の墨にくつろげ日脚伸ぶ
節分や福の内にも鬼の貌
さりながら邪悪の獄も寒の明
早春の風の運べり喜悦の句

出利葉孝

大焚火かざす手と手に真あり
バレンタインモダンチョコ対猪チヨコレイト口令糖
風が鳴く春を阻止するビル谷間
首筋にやんちや坊主の霰かな
冬太郎早く譲りなその座席



橋本順子

わが星の青き息吹や露の臺
如月の松林ゆく人の影
六根のするどくなりし二月かな
群青の闇深くあり春の雪
天空に浮かんでゐたる花の山

平野多聞

斧入れて老いの反骨冬筈
物の怪の白き息吐く男鹿半島
冬すみれ空しく過ごす我に喝
種一粒仏地に樹ちて法隆寺
春暁の余白に一句賜はりぬ



藤田美耶子

薄墨の影に色あり春の樹木
CDの鳥の声聞く春の昼
暖かや試乗ポニーは伏し目がち
養生中の木札ひかりぬ楊貴妃梅
病む母の白き指先梅咲く

三浦純子

大寒とは名ばかりなりし暦かな
冬ざるる川面に流す加賀友禅
薄氷の庭の光りて歩み入る
博物館仏像を見る冷たき手
寒空に蘇州舟歌高らかに

三木 亨

夕暮にひとつ伸びして春の猫
SPは肉声近し針 供養
寒明の香り深める焙煎機
雪解野に人類抹殺計画書
恋激し燃え立つ春の雪はげし

安野眞澄

神木を浄めし寒の静寂なり
晴の日の臘梅の香の濃かりけり
朝の路轍の跡ゆく深雪晴
露の臺苦みを好む齡となる
モノクロの雛壇背ナに座して吾

柳橋繁子

猟銃の響み真昼の朽木村
御影堂の逆さ銀杏や木の芽和
臙夜が大きく振るる心電図
天空の城の石垣草萌ゆる
橋脚にかかる流木水温む

山田佳子

春めくや雲ゆつくりと流れをり
石山の西国札所の蜷汁
百千鳥釈迦牟尼仏と応唱す
糸柳きのふもけふも写経して
春寒や漣たちし岬かな

槐 集

高橋将夫 選

シンプルにパッチワークの冬田かな 大阪 出利葉孝

瞬きする米粒ほどの木の芽かな
冬の濤巖に挑むシャバダバダ
ポピュリズムドローヴァー海峡冬怒涛

春雷にのけぞる肉体エクスタシー
この風が季節を分かつ野水仙

平野 多聞

探梅や未知に分け入る俳句道
老木の紅一輪や一茶の忌
シンホニー楽器とまぐはふ春の夢
節分や鳩にミサイル打つ男

さらば欧州ユニオンジャックに寒鴉 芦屋 田中 信行

マスクしてマスクの人と話しけり
冬のウイルス迎へ撃たんと火酒干す
冬うらら老母と分け合ふモンブラン
帰国して蛤椀の安堵かな

風花の招く十方浄土かな 大阪 藤田美耶子

冴返る脳の画像の小宇宙
南座の舞妓総見節分会
盆梅の瘤にひそみし忍の文字

白梅や背すじ伸びたる人と会ふ
水仙の花の香束ね持ち帰る 竹原 久保 夢女
かぎろひや告白と言ふ手段あり
大根やいまさら器量言はれても

鬼も蛇もここまでくれば友の春
春の月貝殻骨のむずむずす
眼下いま三川霞める石清水 枚方 高野 昌代

あたたかや俳縁いただき「喜悦」届く
静寂やこの字に籠める炭の音
砂利踏んで音は脳裡を春めかす
越後路や一茶一茶と木の芽ふく

銀河往来

シンブルにパッチワークの冬田かな 出利葉 孝

稲が刈られた跡の冬田の景は実にシンブル。畦で区切られた田んぼが広がる景に布を繋ぎ合わせたパッチワークの作品を重ねた視点が素晴らしい。へ瞬きする米粒ほどの木の芽かなの「木の芽の瞬き」の感性にも感動。へ春雷にのけぞる肉体（からだ）エクスタシーは大胆だが、賛同する。

節分や鳩にミサイル打つ男 平野 多聞

節分に豆を鬼に撒くのではなく、ミサイルを鳩に打つという。鳩は平和の象徴。それにミサイルを打ちこむ男と言えは想像に難くなくろう。平和を希求する一句。

へこの風が季節を分かつ野水仙の句、ミサイルの掲句とは対照的でデリケートな一句。

さらば欧州ユニオンジャックに寒鴉 田中 信行

英国の国旗に配された寒鴉が英国の今を象徴している。それにしては「離脱」の行方はどうなることか。

風花の招く十方浄土かな 藤田美耶子

なるほど、「風花」は「浄土」へと招いているように見えて来る。ところで、仏教では十方に無数の世界と浄土が有るといふ。「我々の宇宙の他にも別の宇宙がある」という理論物理学における並行宇宙論が想起されて興味深い。

鬼も蛇もここまでくれば友の春 久保 夢女
ここまで来れば鬼も蛇も怖くないどころか友たという。年の功とはこのことか。

静寂やこの字に籠める炭の音 高野 昌代
炭火が静寂の中で時折りパチパチと弾ける音。まさに炭火の本質に迫る一句。

へ越後路や一茶一茶と木の芽ふくの句、一茶が越後路にマッチし、また木の芽吹きに対するオノマトペにもなっており、さらにリフレインとしても効いている。

大の字になりゆりかごの春の海 柴田 靖子
春の海の波の揺りかごに揺られている姿が想像されて心がなごむ。思わず大の字になりそう。

何度でも息吹き返す紙風船 時澤 藍
紙風船を膨らませ、すばめて又膨らみます。ユーモラスに紙風船の本質に迫っている。

あるがままに生きて悔いなし桜かな 中 貞子
さらりと述べられている人生観に素直に共鳴する。私もまたかくありたいと願う。

一望の立春の空 歎喜天 阪倉 孝子
立春の空の素晴らしさをどう詠むか。作者は全てを「歎喜天」に託した。歎喜天は財宝、子宝に御利益があるという。